愛媛大学教育学部紀要　人文・社会科学　第32巻　第2号　9～18　2000

「～へと＋動詞」という表現をめぐって

杉　本　和　之
（日本語日本事情研究室）

1．はじめに

日本人の日常の会話ではめったに使用されないが，小説の地の文などで時折使用される，「～へと＋動詞」という形式をもった次のような表現がある。

（1）「腹ごしらえをしますから」と，昌也は，料理の並んだテーブルへと歩いて行った。（赤川次郎『女社長に乾杯！』新潮文庫）

（2）このまま行けば道は戦争から破滅へと通じているだけで，……（阿川弘之『山本五十六』新潮文庫）

（3）真黒な梢の上に出ている月が駕籠にあわせて西へ西へと動く。（遠藤周作『沈黙』新潮文庫）

（4）ただでさえ影の薄かった千代子をさらに片隅へと追いやった。（北杜夫『楡家の人々』新潮文庫）

日常の会話であまり使用されないためか，この形式は今まで文法研究のテーマとして取り上げられた形跡がほとんどない。もちろん，格助詞一般について，格助詞「へ」について，「引用」という現象について，助詞（或いは助動詞）「と」についてといった各論においては，多くの先行研究が見られるが，「～へと＋動詞」という形式に関しては，管見するところ，わずかに矢澤（1999）の報告があるのみである。矢澤（1999）は「ニ格」「ヘ格」との比較の上で，これを「ヘト格」という形式で紹介し，①「ニ格」「ヘ格」が経路「ヲ格」と共起しにくいのに対して，「ヘト格」は「マデ格」と同様，経路「ヲ格」と自然に共起する。②「ニ格」「ヘ格」が必須的な成分であるのに対して，「ヘト格」「マデ格」は状況的な成分である，としている。

筆者はこの矢澤説に対して，先ず，「ヘト格」という表現そのものに疑義を感じる。「ヘト格」という名称は当然「へと」を一つの格助詞と見る見方の表れであるが，筆者は「へと」を独立した格助詞にまで成熟したものとは，見なしていない。又，理論上「へと」を一つの格助詞と捉えるからには，その前提として「へと」における「と」そのものの文法的な定位が必要だと考えている。又，「ヘト格」＝状況成分という捉え方に対しては，筆者は「へと」の多くの用例を検討してみて分かることだが，通常「へと」は状況成分としてでなく，必須成分として使用されていると考える。このことは上の(1)～(4)の例文からも明白で，「へと」はむしろ「へ」の必須成分としての弱さを補強するために用いられていると見る。

さて，この論稿では，「～へと＋動詞」の機能と意味を把握するために，段階を追って，次の

ように分析・検討を進めたい。即ち，まず基本的な作業として「～へ＋動詞」の意味・用法の類型を整理し，つづいて「～へと＋動詞」が用いられている言語現象に重点を置き，その形態的特徴の分析を行い，それぞれの場合における「へと」の機能と意味を探る。そして，その結果に基づいて最後に「と」の文法上の性格の確定を行いたい。

なお，例文の出典は次の通りである。小説の場合はいずれも『NEC CD－ROM 版　新潮文庫の100冊』（新潮社版）による。

（女社長）赤川次郎『女社長に乾杯！』新潮文庫
（山本）阿川弘之『山本五十六』新潮文庫
（沈黙）遠藤周作『沈黙』新潮文庫
（楡）北杜夫『楡家の人々』新潮文庫
（人民）星新一『人民は弱し官吏は強し』新潮文庫
（華岡）有吉佐和子『華岡清洲の妻』新潮文庫
（あす）井上靖『あすなろ物語』
（黒）井伏鱒二『黒い雨』新潮文庫
（パ）開高健『パニック』新潮文庫
（さぶ）山本周五郎『さぶ』新潮文庫
（国）司馬遼太郎『国盗り物語』新潮文庫
（竪琴）竹山道雄『ビルマの竪琴』新潮文庫
（月）サマセット・モーム　中野好夫訳『月と六ペンス』新潮文庫

2.「～へ＋動詞」の類型

「～へ＋動詞」で用いられる格助詞「へ」の用法について，できるだけ細分化して列挙すると次の７つに分けられる。

1）動作・作用の向けられる方向・目標
前へ進む。　北へ向かう。　船首を西へ向ける。　先へ目をつける。　遠くへ視線を移す。　外へ出かける。　霧の中へ消える。

2）動作・作用の向けられる対象
責任を部下へ押しつける。　若い研究者へ影響を与える。　吉田課長へ相談をもちかける。　母へ近況を知らせる。

3）主体或いは客体の移動先・到達点（空間）
日光へ行く。　家へ帰る。　駅へ着く。　部屋へ入る。　現場へ駆け付ける。　選手が球場へやって来る。　事務所へ戻る。　危険な箇所へ近付く。　３階へ上がる。　荷物を支店へ送る。　子供を公園へ連れて行く。　客を別室へ案内する。　社員を窓際へ追いやる。　ごみを川へ捨てる。　人を車へ押し込む。

4）主体或いは客体の移動先・到達点（時間）
時間を過去へ溯る。　昔へ引き戻す。　観客を遠い未来へ誘う。

5）連結点
国道へ通じる。　海へつながる。　次回へ続く。

6）主体或いは客体の状態変化の結果

成熟へ向かう。　信号が赤から青へ変わる。　会社を隆盛へ導く。

7）動作の存在する場所

ここへサインして下さい。　荷物は玄関へ置いときます。　そのソファへかけてください。

傷口へ薬をつける。

最後の7）はユニークな指摘で，例文をも含めて田中章夫（1977）「助詞（3）」（『岩波講座日本語7　文法Ⅱ』所収）から借用した。

ところで，格助詞「へ」は格助詞「に」との関連が深く，田中（1977）の言う通り，「～へ＋動詞」で用いられる格助詞「へ」の用例は全て「に」に置き換えることができる。但し，格助詞「へ」は，多くの研究者が指摘するように，格助詞「に」とは違ったニュアンスをもっている。即ち，離れた目標を目指して経路を移動するという動きの示唆である。田中（1977）はその特徴を「指向性」「経過性」と呼んでいる。一方格助詞「に」にはそのようなダイナミックな特徴はない。

なお，1）～7）について若干の補足を加えておこう。

1）の「方向・目標」と3）4）の「移動先・到達点」の違いは，「方向・目標」が漠然としたものであるのに対して，「移動先・到達点」というのが具体的で特定の箇所（多くは特定の地点）であるという点である。2）は対象が空間的な方向・地点ではなく，人・組織の場合である。これらの文では，対象は文法上，間接目的語を表す。本来格助詞「に」が担うものであり，全ての間接目的語が「へ」で代替されるわけではない。「学生へ英語を教える」「友達へプレゼントをあげる」とは言えない。3）の「客体の移動先・到達点」は，動詞に他動詞が使用された場合で，どちらかといえば，自動詞の場合に比べて移動の経路が短いものが多いという特徴がある。5）「連結点」は単に2者の関係を表示するのみで，主体・客体に移動という動きが見られない。6）「主体或いは客体の状態変化の結果」を特に設けたのは，「Xへ」でXに状態名詞が用いられるが，その状態名詞は，1）3）4）でXに用いられる場所名詞，或いは方向名詞に比べて，収斂性が弱く「Xへ＋状態変化動詞」という表現がやや成立しにくいという特徴が見られるためである。「夏に変わる」「危篤に陥る」などは「夏へ変わる」「危篤へ陥る」とはいえない。7）「動作の存在する場所」は本来静的特徴をもった格助詞「に」の指定領域であったところに「へ」が侵入している証しである。「自転車へ乗る」「体へ触る」等はいえない。この7）は「～へと」とは無関係な用法である。以上の1）～7）の用法のうち，最も基本的な用法は1）と3）である。

3．「～へと」の分布

3－1．副詞類

（5）　広島での負傷者は次から次へと近隣の村々へ帰って来る。（黒）

（6）　それは見る間に大粒の涙となり，彼女の下ぶくれした頬を，次から次へと伝わった。（楡）

（7）　話題は次から次へと止まるところを知らなかった。（月）

このように「次から次へと」は副詞句としてかなり使用されている。単独の副詞といっても差支えない。もちろん「へ」を外した「次から次へ」の形でも使用される。

この「次から次へと」の「と」の機能について考えてみよう。まず思い浮かぶのが「副詞の語

尾」としての「と」である。厳密に言えば情態副詞の語尾である。「悠然と」「堂々と」「ゆっくりと」「ぽつりと」「ざあざあと」のように「と」を付加することによって副詞としての性格を確立し，被修飾部への関係付けを行う。「次から次へと」において，「と」が承けているのは「次へ」という一つの格だけではなく，「次から次へ」という二つの格を受け止めている。動詞句の表す一連の数多くの複雑な動きの様態を，「次から次へと」という一つの表現にまとめ挙げて統一・抽象化している。その結果副詞としての機能を獲得しえたのである。単純に「A から B へ」という特定の具体的な流れの表現であれば，副詞の機能を有しえない。

（8） それとも先へ先へと一直線に進み，……（楡）

（9） 間近の海面はとぶようにあとへあとへと流れ去る。（楡）

この「先へ先へと」「あとへあとへと」も抽象化の度合いが高く，やはり副詞類に入れるべきものと考えられる。

「へと」を含む副詞類としては他に「どこへとなく」「いずこへとなく」が挙げられる。

（10） ネズミはどこからともなくあらわれてどこへともなく消え，音信を断ったのだ。（パ）

（11） 「ふりきっていずこへともなく，消（う）せられましてござりまする」（国）

これらは同様の疑問代名詞「だれ」「なん」を用いた「だれと（も）なく」「なんとなく」と同類の副詞句である。やはり単独の副詞と考えても問題はない。いずれも，引用の助詞「と」を含む「～ということ（も）なく」の省略であろう。疑問代名詞を用いることによって動きを抽象化して表現している。

3－2．X へ X へと，X へ Y へと

（12） ここでも避難して行く人たちは山へ山へと押しよせて，……（黒）

これも複数の複雑な動きの方向を「山へ山へと」で抽象化し統一している。「と」はもちろん「山へ山へ」という二つの格を受け止めている。このような複雑な動きの抽象化としての「X へ X へ」には「と」が必要だと考えられる。「山へ山へ」というのは一つの抽象的なモデルで，動きの内容を抽象的に表示し，「と」はそれを例示として動詞句に関係づける機能を果たしていると見られる。次の，有名な民謡「佐渡おけさ」の歌詞も同類の用例である。

（13） 佐渡へ佐渡へと　草木もなびくよ。

（14） 頼芸は山伝いに北へ北へと逃げ，ついに越前境いを越え，一乗谷に本拠をもつ朝倉氏に保護された。（国）

例文(14)は複数主体の移動ではないが，当然複数回の逃げる動きを「北へ北へ」で抽象化したものと思われる。「と」の機能としては(12)の例と同じものだとみなしうる。

「X へ Y へと」の用例には次のようなものがある。

（15） ――さぶは包みを抱えてはいって来，左へ右へとむやみに頭をさげ，なにやら礼のような，詫びごとのようなことをもぐもぐ云った。（さぶ）

（16） そのたびに次郎吉の躯は左へ右へとよろめいたが，突然おかしな悲鳴をあげてむしゃぶりついてきた。（さぶ）

「左へ右へと」というように対句になっているものである。実際の動きは合計２回にとどまらないはずであるから，これもやはり複数の動きの抽象化と考えられる。

（17） このところ，ひっきりなしに，毎晩のように夢を見る。その対象が次第々々に，むかしへ，過去へと溯ってゆくようである。（楡）

これは時間的移動の例である。「X へ Y へと」の用例で，「と」は「X へ」「Y へ」の二つの格を受け止めて直後の動詞につないでいる。

(18) 翌日麻子は会社へ，大地は泊りがけの夏期講習へと出かけたのでした。
(『NHK ビデオ教材／日本語教材　青春家族２』)

これは単なる「X へ Y へと」の例ではない。「X へ」「Y へ」のそれぞれに主語が入っている。「麻子は会社へ出かけ，大地は泊りがけの夏期講習へと出かけた」の，省略だと考えられる。「と」は「麻子は会社へ，大地は泊りがけの夏期講習へ」全体を文末の動詞句「出かけたのでした」に関係付ける機能を果たしている。

以上，「X へ X へと」「X へ Y へと」の例を見たが，いずれも「と」の働きは二つの格（X へ，X へ，或いは，X へ，Y へ）を一纏めに統合して文末の動詞句に関係付けることだといえるだろう。実際の用例中には次のような「X へ Y へ Z へと」という３つの格の統合の場合もある。

(19) そうして熊五郎は，ソヴィエトへ，シベリアへ，バイカル湖畔のウローヌデへと運ばれていった。(楡)

３－３．X から X へと，X から Y へと

複数の動きを抽象化する「X へ X へと」に類似した形式として，次のような「X から X へと」の形式が挙げられる。

(20) こうして村から村へと食糧を求めながら行くのですから，ずいぶんみじめでもあり，危険でもありました。(堅琴)

(21) その代り，上ノ山一番の旅館を借りきった選挙事務所を中心として，人から人へと相場の金が流れていった。(楡)

「と」は「X から X へ」を抽象化された動きの内容として例示し，動詞句と関係付けている。「と」を付加しない「X から X へ」の形でも文は成立するが，「と」がある方が関係付けが明確である。

「X から Y へと」の用例としてはまず冒頭に掲げた(２)が挙げられる。

(２) このまま行けば道は戦争から破滅へと通じるだけで，……。(山本)

複数の動きの抽象化ではないが，「戦争から破滅へ」で状態変化の統一的な抽象化モデルを呈示している。「と」がないと文の成立は難しい。

(22) 彼の視線は，スプーンから兄の口へ，兄の口からジェリーの鉢へと真剣に移動した。(楡)

これは「X から Y へ，Y から Z へと」という緻密で具体的な表現になっている。この経路を「と」が一纏めに統合して動詞句につないでいる。これもやはり「と」がないと文の成立は困難である。

「X から Y へと」による長い経路の呈示については次の用例が相応しい。

(23) ……葬列は水交社の坂を下りて右折し，神谷町の千代子の家のすぐ前から，虎の門，内幸町へと，ゆっくり進んで行った。(山本)

「～へと，」と読点があるように，動きのプロセスを示す長い例示の句が形成されている。「と」は「神谷町の千代子の家のすぐ前から，……内幸町へ」全体を承けてまとめ挙げていると見るべきだろう。

(24) はじめに黒田医院で診察を受け，次に大村医院で診察を受け，それから九一色病院へ

<u>と</u>いう順らしい。(黒)

「X から」という格はないが，経路を全て示し，その全ての経路をトイウで承けている。「Y へ」の後に引用の「という」が付加された珍しい例である。

「X へ X へと」と「X から Y へと」の両方の形式を併せもつ用例もある。複数の動きの抽象化の例である。

(25) その代りに，一つでも起こればこれは消えることなく口から口へ親から子<u>へと</u>語り継がれていく。(華岡)

3－4．X へと

これまで検討してきた例は，副詞類の「どこへともなく」「いずこへともなく」を除けば，全て「と」が複数の格を承ける形式であったが，次は「X へと」のように単独の格「X へ」のみを承ける場合である。この形式は実際の使用において個人差の大きいもので，作家によって使用の度合いの変動が激しい。使用しない作家は全く使用しない，逆に使用する作家の中には愛用といっていいほど相当数多く使用する場合がある，といった特徴が見られる。もちろん「数多く使用する」といっても，「X へ」と「X へと」の使い分けは十分になされており，「X へと」の使用は「X へ」の使用の数分の一以下である。又，単独の格の「へと」の使用の場合について考えると，当然複数の格の場合の「へと」の使用とではその理由・必然性が相当に異なってくる。

(26) 伸子は，柳が呼んでおいてくれた，黒塗りのハイヤーでアパート<u>へと</u>帰って来た。(女社長)

(27) ……一か所だけ膝から下を濡らして浅瀬を横切ると，向こう岸<u>へと</u>渡った。(あす)

(28) ほとんど小柄といってよい肌の黒い毛深い力士が静かに土俵<u>へと</u>向った。(楡)

(29) 真剣な目つきで街<u>へと</u>出ていった。(人民)

以上4例に用いられている「へ」の用法は，第2節で紹介下した7つの用法のうち，最も基本的な，1）動作・作用の向けられる方向・目標，もしくは，3）主体或いは客体の移動先・到達点（空間）を表すものであり，又，文自体も特殊な構造を有していない。「と」の付加のない「X へ」の形式で十分文が成立するものばかりである。では，それにも拘らずどうして，「へと」が選ばれたのであろうか。考えられる理由は「へ」の基本的な性格そのものにある。「へ」は田中（1977）が「指向性」「経過性」と呼んだように，離れた目標を目指して経路を移動するという特性をもつ。この「指向性」「経過性」が逆に，帰着点・到達点の表示の弱さを惹起する。「へ」を「に」に替えれば，帰着点・到達点は明確に表示されるが，その代り「指向性」「経過性」は消える。従って，「指向性」「経過性」を呈示しながら，なおかつ帰着点・到達点を明示するという二重の要請を満たそうとすれば「へと」が最適という結論になる。文法機能上は，「へ」の「指向性」「経過性」は「X へ」という格と動詞との関係の弱さの原因となる。それを，「X へと」とすることによって，文中で「X へ」が特立され，「X へ」と動詞の関係が強化される。その結果，文体的には，スピード感が表れる。個々の出来事がスピード感をもって小気味よく叙述される。「神戸へ向かう。」と「神戸へと向かう。」を比較すればその差は明らかであろう。

なお，帰着点・到達点の表示の弱さを特性としてもつ「へ」が，前述した，3）主体或いは客体の移動先・到達点（空間）を基本用法として持ちうるのは，移動先・到達点を表す名詞に主に場所名詞が用いられるためであると，考えられる。場所名詞は移動性の動詞とともに使用された場合，移動先・到達点として解釈されやすいという特徴をもつからである。

ところで，ちなみに，「X へと」の実際の使用例では，「X へ」とするとニュアンスに相違は生じるが文としては十分に成立するという(26)～(29)のような例が圧倒的に多い。

(30) 荒井は何だかわけの分からない独り言を呟きながら席を立つと，奥の部屋へと新聞を持って入って行った。(女社長)

(31) その年は大の字の下部があらかた消えてしまったのに，その上方へと蛇のような新たな火の筋がのびてゆき，……。(楡)

これらの用例は「X へ」とそれを受ける述語動詞句との間に挿入句が入ったものである。例えば例文(30)で，「X へ」と動詞句が連続する形なら，「新聞を持って奥の部屋へ入って行った。」で，「へと」の使用は必要ない。しかし「新聞を持って」を挿入句として割り込ませるためには，原文のように「奥の部屋へと新聞を持って入って行った。」と「へと」を使用した方が座りがいい。この場合「と」の役割は「X へ」と動詞句との結合である。「X へと」とすれば，「X へ」が特立され，その後に挿入句が入ったとしても，後ろの動詞句への関係が円滑になるというわけである。

(1) 「腹ごしらえをしますから」と，昌也は，料理の並んだテーブルへと歩いて行った。(女社長)

上の(30)(31)に続いてこの(1)も「X へ」の形ではやや座りが悪い。その主たる理由は「テーブル」の場所名詞性の弱さにある。場所名詞性の弱い名詞（通常，物体・人を表す名詞）には，例えば「窓の方へ／ところへ」「受話器の方へ／ところへ」のように「～の方／ところへ」とすればいいのだが，(1)のように「X へと」を使用することによっても可能だということがわかる。ここにも，「X へ」と動詞句の関係付けを強化する「と」の機能が窺える。

(32) 急いで銀行を出ると，伸子はスーパーへと走った。(女社長)

これも「X へ」なら「スーパーの方へ～」「スーパーへ向かって～」或いは「スーパーへ走って行った」とすべきところである。「走る」は「歩く」「泳ぐ」或いは「急ぐ」と同様移動の方法を表す動詞であって移動動詞そのものではないからである。ところが「へと」を用いればこのように文を成立させることができる。

次のような状態変化を表す構文にも「へと」は有効である。

(33) 山々は紫色をおびながらその突兀とした立体感をひそめ，影絵のような平板なものへと変りはじめた。(楡)

(34) 幸い，否，当然のことだが，病院は一路隆盛へと向かっている。(楡)

状態名詞もやはり場所名詞に比べて帰着性，収斂性が弱い（「へ」自体も帰着性，収斂性が弱い）ため，「と」の助けを必要とする。「成功／完成／勝利／繁栄／破滅へ向かう」と「成功／完成／勝利／繁栄／破滅へと向かう」とを比較してみれば，その差は歴然としている。状態変化の結果は前述したように，本来は格助詞「に」の対象領域である。(33)(34)とも「に」を用いれば文は成立するが，ニュアンス上，ダイナミックな動きは表示できない。

以上「X へと」の種々の用法を検討したが，「へと」の使用は予想以上に多くかつ広範囲にわたっている。我々の日常の会話ではほとんど使用されておらず，通常は関心の埒外にあるが，それでも我々の気付かぬところで，書き言葉として増殖を続けている。「へ」以外の他の格助詞には見られない現象である。これほどまでに「へと」の使用が広がった原因は何であろうか。それを考える場合，やはり「へ」そのものの持つ基本的特性に話を溯らざるをえない。即ち，「へ」の「指向性」「経過性」という特性，逆に言えば「へ」それ自体の帰着性・収斂性の弱さである。

その特性のゆえに，「X へ」と述語の動詞との関係付けを強化するため「と」が多く用いられていると考えるのが妥当なところであろう。

4.「と」の文法的性格

4－1.「引用」

以上述べてきた「へと」は，いわゆる「引用」の範疇に収まるものであろうか。確かに副詞類の「どこへと（も）なく」「いずこへと（も）なく」は「どこへということ（も）なく」「いずこへということ（も）なく」のように通常の「引用」の形式に置き換えることができる。又，前述した(24)の例のように，「へという」という「引用」の形式を内部にもつものもあった。

(24)　はじめに黒田医院で診察を受け，次に大村医院で診察を受け，それから九一色病院へという順らしい。(黒)

これらは明らかに「引用」の例であるが，他のものは「引用」と考えるのは難しい。「引用」と認定するには，先ず，言う／話す／述べる／報告する／主張する／聞くなどの発話動詞，或いは思う／考える／想像する／信じる／判断するなどの思考動詞が用いられ，なおかつ発話もしくは思考の内容を表す文・句・語の表示が必要である。「と」は発話・思考の内容と発話・思考の動詞を繋ぐ機能を果たす。しかし次に掲げるような「へと」の通常の使用例は発話動詞・思考動詞の存在ないしは省略を前提としていない。

(12)　ここでも避難して行く人たちは山へ山へと押しよせて，……(黒)

(20)　こうして村から村へと食糧を求めながら行くのですから，ずいぶんみじめでもあり，危険でもありました。(竪琴)

(26)　伸子は，柳が呼んでおいてくれた，黒塗りのハイヤーでアパートへと帰って来た。(女社長)

(34)　幸い，否，当然のことだが，病院は一路隆盛へと向かっている。(楡)

4－2. 例示

「と」の機能の中では，「引用」に近い概念として「例示」が挙げられる。この「例示」は発話・思考の動詞を必要としない。

(35)　15，16，17と私の人生暗かった。

(36)　1995年は阪神大震災，オーム真理教事件と大事件が相次いだ。

この「例示」は，「X へ X へと」「X へ Y へと」「X から X へと」「X から Y へと」のような複数の格を承ける「へと」の機能に近い。その多くの場合，上述の(12)(20)のように「へと」は複数の動きをモデル化・抽象化して例示し，動詞句に繋いでいる。しかし(35)(36)では，「例示」の「例」自体が具体的なもので，その点では数は少ないが次のような，具体例の「へと」がそれに最も近いといえる。

(19)　そうして熊五郎は，ソヴィエトへ，シベリアへ，バイカル湖畔のウローヌデへと運ばれていった。(楡)

(22)　彼の視線は，スプーンから兄の口へ，兄の口からジェリーの鉢へと真剣に移動した。(楡)

このように，「へと」の機能の範疇として「例示」が一応の候補となるが，用例中約半数を占

める，上述(26)(34)のような，単独の格を承ける「へと」が「例示」の機能を果たしているとはいい難い。

4－3．連用機能の強化

4－1．で述べた，「へという」という「引用」の形式を容易に摘出できる例を除いた，他の全ての「へと」の類型，即ち副詞類，複数の格を承ける「へと」，単独の格を承ける「へと」に共通して指摘できる「と」の機能は，「～へ」という格或いは句を述語の動詞句に関係付けるという働き，即ち連用機能の強化ということである。「引用」の「と」自体，文法上極めて異質な発話・思考の内容と発話・思考の動詞とを関係付けている。副詞類の「次から次へと」においても，「と」は副詞の語尾とはいいつつ，やはり連用機能の強化という点においては共通している。複数の格を承ける「へと」の場合，「例示」という機能を果たしつつ一方において「と」はやはり，述語動詞への関係付けという点で連用機能の強化の働きが見られる。単独の格を承ける「へと」に関してはこの点，既に自明の事である。

格助詞とは本来それぞれの格を自動的に述語に結びつけうる機能，即ち連用機能をもつものであり，格助詞「へ」に連用機能を強化する語が連結すること自体，理論的には矛盾した現象であると言わざるをえないが，前述したように，格助詞「へ」自体が帰着性・収斂性の弱さをもつがゆえに，連用機能を強化する「と」の支援を必要とするということで説明はつく。

では，この「と」は，品詞上はどのように定位すればよいのであろうか。これまでに挙げた「引用」の格助詞，「例示」の格助詞，副詞の語尾，格助詞の連用機能を強化する語，の他にも「と」の用法と考えられるものとして，1）「山と積まれる」「汗が滝と流れる」のような，いわゆる「内容」を表す格助詞「と」，2）「大惨事となる」「廃墟と化す」のような状態変化の結果を表す格助詞「と」等が挙げられる。これらは全て意味・用法上共通性が見られ，深い部分で繋がっていると考えられる。そこで時枝（1950，1954）は独自の言語過程説に基づいて，これらを全て，連用修飾的陳述が認められるとして，一括して「指定の助動詞・だ」の連用形とした（「副詞の語尾」については，体言に「と」がついたものと捉える）。三上（1972）も，時枝の一括処理に賛意を示している。しかし問題は「助動詞」として扱うことにある。日本語における「助動詞」とは動詞を助ける語でなく，述語を助ける語であり，述語の形成に寄与する語である。ところが，今まで述べてきた「と」のこれらの用法に共通する機能はやはり，「連用機能の表示」という点であり，述語の機能とは一見関係が薄い。それが，時枝の述べるごとき「連用修飾的陳述」という段階にまで至るものなのかという点に疑問が残る。この論稿の研究対象である「へと」における「と」において，「連用修飾的陳述」が摘出できるとはとうてい思えない。「連用修飾的陳述」とは例えば，文中における用言の中止法等に相応しい概念であって，「へと」，特に単独の格を承ける「へと」には相応しくないと，筆者は判断する。

だとすれば，「へと」の「と」は「Xへ」の部分を特立させて，動詞句に関係づける連用機能の強化を果たすと同時に，意味上は「内容」を示す（引用も例示も動作・作用の内容を示すという点で共通した性格をもつ）格助詞だということになる。動詞が要求する指向・移動・変化の内容を「Xへと」が示すということになる。但し，格助詞とは本来，述語（主に動詞）がその意味を十全に表示するために内在的にもっている名詞との関わりが分節化されて現れたものである。例えば動詞「食べる」がその意味を全うするためには，「だれが」「なにを」「なんで（手段）」「どこで」といった名詞的役割が自動的に必要となる。これらの格表現は統語論上，当然ながら

動詞との連用関係をもつが，同じ連用関係といっても，「急いで食べる」「きれいに食べる」のような，いわゆる連用修飾語（副詞，或いは用言の連用形がその任に当たる）とは文法的性質を異にするはずである。ところが，格助詞としての「と」の「内容」を示す用法というのは，格助詞としてかなり危ういものである。例えば「山と積まれる」「汗が滝と流れる」で，「山と」「滝と」は動詞が内在的にもつ名詞的役割が分出したものとは考えられない。むしろ情態副詞に近い連用修飾語の一種を形成していると見た方がいいのではないだろうか。「内容」の一種たる例示，或いは状態変化を表す用法もまた同様である。引用の「と」が受け持つ「発話内容・思考内容」は確かに発話動詞，思考動詞が内在的にもつ必須補語的性格が強いが，逆にこれらは文の形式をもつことが主で，名詞的役割とはいいがたい。このように，従来格助詞と位置づけられてきた「と」自体が（「同伴者のト」「相手のト」を除いて）実は格助詞としての性格上，特異な語であることがわかる。ここでは，従来の通説の延長線上ということで，「へと」の「と」は一応格助詞としておくが，今後時枝，三上の説を再吟味した上で，「と」の研究が深まり，更にはこの「へと」の「と」に対して品詞分類上，あるいは文法体系上，精緻な位置付けが与えられることを期待したい。

参　考　文　献

（1）矢澤　真人（1999）「特集　手のひらの言語学　質問３－「東京に着く」と「東京へ着く」とはどう違うのですか。－回答者＝矢澤真人」『月刊言語　1999年５月号』（大修館書店）
（2）田中　章夫（1977）「助詞（３）」『岩波講座日本語７　文法Ⅱ』（岩波書店）
（3）時枝　誠記（1941）『国語学原論』（岩波書店）
（4）時枝　誠記（1950）『日本文法口語篇』（岩波書店）
（5）時枝　誠記（1954）『日本文法文語篇』（岩波書店）
（6）三上　　章（1972）『現代語法序説』（くろしお出版）
（7）山田　孝雄（1936）『日本文法學概論』（宝文館出版）
（8）国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞－用法と実例－』（秀英出版）
（9）森野　宗明（1973）「格助詞」『品詞別日本文法講座　助詞』（明治書院）
（10）城田　　俊（1993）「文法格と副詞格」『日本語の格をめぐって』（くろしお出版）
（11）藤田　保幸（1981）「準引用」『待兼山論叢　第15号　文学篇』（大阪大学文学部）
（12）藤田　保幸（1988）「「引用」論の視界」『日本語学　1988　９月号』（明治書院）
（13）藤田　保幸（1994）「引用されたコトバの記号論的位置づけと文法的性格」『詞林　16』（大阪大学）
（14）砂川有理子（1987）「引用文の構造と機能－引用文の３つの類型について－」『文藝言語研究・言語編13』（筑波大学文芸・言語学系）
（15）砂川有理子（1988）「引用文の構造と機能（その２）－引用句と名詞句をめぐって－」『文藝言語研究・言語編14』（筑波大学文芸・言語学系）
（16）砂川有理子（1988）「引用文における場の二重性について」『日本語学　1988　９月号』（明治書院）
（17）青木　怜子（1956）「「へ」と「に」の消長」『國語学24』（武蔵野書院）
（18）柴谷　方良（1978）『日本語の分析』（大修館書店）

（1999年10月12日受理）